

清流

題字：芳野 充

令和2年2月29日
第38号

発行所 加来不動産(株)
発行者 加来 寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

支えられて今のわたし

「謙虚さがなくなる兆候」の十一番目は、「自分がえらく思えて、他人がバカに見えてくる」とあります。「他人がバカに見えてくる」とは、何とも太々しい話ですが、じつはわたしが一番できていない項目と言えます。

わたしは先代が急逝したため、二十五歳という若さで「社長」に就任しました。しかし立場や環境とは恐いもので、右も左も分からない状態になると、それらしく振るまおうという気持ちになっていました。

その結果、必要以上に虚勢をはったり、外で得た情報を自分ではできないのに、上から押しつけたり、見栄をはって交際費をつかうなどしていた時期があります。

その時期は必死さにくわえ、傲慢さも後押しし、「これが正しい社長像だ」と勘ちがいし、気づかないうちに「俺がえらいんだ」という思い込みに強くなりついていいたと思います。

当時、会社には歳のちかいスタッフが四名いました。しかし、わたしのその傲慢さが原因で、社内での人間関係はギスギスし、始業時間がすぎても無断遅刻や無断欠勤が蔓延し、ひどいときには、朝会社にも誰もこないという有り様。そして比例して家庭環境も良くない状況でした。

途方にくれるなか、「これではいけない。何とかしなければ」と、ここで初めて池田繁美先生（素心学塾塾長）がおっしゃる、「素直さ」というものの大切さに気づき、またその行動を実践しはじめました。

すると、時間の経過とともに、わたしには知らず知らずのうちに、「心のクセ」がこびりついており、とても傲慢になっていることが理解できるようになってきました。

いまになってようやく、スタッフや家族の支えで、わたしが安心して出張にでかけられる。あるいは、自己研鑽にあてる時間や地域活動に精をだすこともかなっていることへの、感謝の気持ちを感じられるようになってきました。

王陽明（一四七二〜一五二九年、中国明時代の思想家、陽明学の創始者）は、次のようなことを遺しています。「人生の大病は、ただこれ（傲）の一字なり」。人生でいちばん重い病気は「おごり高ぶった心」、それ以外にない、といっています。支えられて今のわたしがいる。このことを肝に銘じ、謙虚に自己を知り、自己を正していきたいと思えます。

加来 寛

